ホトトギス

十二月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別認可雑誌第六二七号
平成二十二年十二月一日発行（第百十三巻第十二号）

俳句随想〔三百四十二〕

汀　子

気になる漢字の間違い、それが許容範囲となって歳時記と称するものに載っていることを知った。正しく継承していくのは難しいかも知れないが、俳句の季題として少なくともホトトギス歳時記では間違いないものにしたい。例えば「心太」という季題である。「心天」と書きたくなるかも知れないが少なくともホトトギスでは容認していない。ある歳時記に載っていることも知った。しかしそれは間違った人が居てそのままになって残って行ったに違いない。私の持っている辞書の全てを調べたがどれにも「心太」とあり「心天」はないのである。詠み方も然り。紫陽花を「しようか」と読むことで詩情が削がれる。やはり「あじさい」と読みたい。言葉は生きている。また文法を盾に取って俳句に執拗な抗議を繰り返す人がいる。「始めに言葉があって文法は後から出来たのである」音便にしてもそうである。間違いと決めつけてはならない。読むのに便宜上音便が出来たと私は理解している。他の歳時記に文句はつけない。

ホトトギスで勉強する方々は「虚子編『新歳時記』」「ホトトギス『新歳時記』」を参考にして頂きたい。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十一年十二月一日　有恒俳句会

名苑の要要の冬紅葉
暁の星仰ぎたるより冬の晴
遠会釈又遠会釈冬紅葉
苑歩き来て煖房に拾はるる
早々と忘年会でありしかな
俳号の由来も聞きぬ年忘

十二月一日　無名会

短日の実感といふ歩幅かな
焼諸の一口づつののどごしに
冬紅葉日の中心の移りけり
早々と決まりし一日年忘
きざはしは冬の星空へと向かふ
コート脱ぐより会場に紛れ込む
下書きの未完の弔辞寒かりし

十二月一日　日本伝統俳句協会忘年会

弔辞書き終へて短日昏れてをり
亡き人を偲ぶ心の小六月

十二月六日　関西野分会

冬晴に加勢を受けし会となる
弔辞書き終へて寒夜の旅支度
鴨飛んで紛るる果のなき空に

十二月六日　下萌句会

短日や三つの会の済めば夜に
悲しみを伝へて息の白きこと
短日の中途半端といふ仕事

十二月七日　ロイヤル俳壇

掃く落葉掃かぬ落葉も庭のもの
実感としての師走はまだ先に
雨漏りの工事はじまる寒さかな
家居していつか忘れてゐし寒さ

十二月八日　大阪倶楽部

十二月八日と気づく朝かな
息白く告げねばならぬことのあり
霜月の過ぎゆく迅さ家居にも
短日の工事の音の昏れそめし
損せしや得をせしやと日短
冬木より冬木へ移る日向かな
短日の暮れてまだまだ時間あり

十二月八日　綿業倶楽部

冬霞脱ぎしばかりの富士俯瞰
艶と見し舞台顔見世ならばこそ
顔見世を出てそぞろゆく京の風
演目の気に入つてゐし顔見世に
冬霞より抜け出せぬ山路かな

十二月十日　清交社

休憩は殆ど無しと牡蠣割女
くり返す牡蠣割る手順見て通る
著ぶくれてゐし安心を纏ひけり
暁の星見る著ぶくれでありしかな

十二月十一日　工業倶楽部

著ぶくれを厭うてをれずなりにけり
粕汁と聞きて帰宅の早まりし
傘とられたるは北風なりしこと
北風に出そびれてゐし朝かな
著ぶくれて行くに憚る出先かな
粕汁の熱々を吹きくつろげる

十二月十六日　夏潮句会

焚火するつもりばかりに終りけり
マロニエの冬芽に托す期待あり
夜空見に星のきざはし通ふ冬
星とんで冬の星座をよぎりけり
冬の薔薇五十本客三十人
足場まだ残されてゐし師走かな

十二月十八日　時雨句会

ひそめたる命吉野の枯葎
ストーブを先づは点して家居かな
似合はないことを承知の冬帽子
冬帽子より現はれて来たりけり
ストーブの薪の火色の更けにけり
雪山の富士の怖さはあなどれず

十二月二十日　野分会

冬の雲動かぬ如く動きをり

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年十二月一日　カトリック新聞選者吟

北窓を塞ぎ待降節の朝

十二月二日　一水会

肝食うて河豚に中りし女かなどうしても寒く言はねばならぬこと

枯尾花従へ富嶽凛とあり

十二月三日　蕉心会

冬の鳥黙らせてゐる雨しとど

街はもうポインセチアが少し染め

彦様は業平似とや都鳥

八分の六ほどの幸冬木立

もうクリスマスツリーを飾りますか

冬の雨漏れくる辺り喫煙所

山茶花の三片ほどに騒ぐ水

千両か十両かいや二十両

若菜はんもうみちのくは雪でつか

十二月五日　日本伝統俳句協会東京・神奈川合同部会

銀杏散る天の余白を広げつつ

高僧も歳末たすけあひ運動

冬帝の息吐く如く雲広げ

十二月七日　はせを句会

丸ビルに灯らぬ窓や暮早し

十二月十日　土筆会

冬桜らしく名苑彩れり

鴨浮寝してゐるふりをしてるだけ

十二月十一日　六甲会

このセーターロンの歯形を付けし日も

桑に闇降りてくるおりてくる

星出でてより巣の舞台かな

ロンの小屋セーターだけが残されて

梟に山家の生活覗かれて

梟に森の妖精目覚めけり

十二月十日　虚子記念文学館投句

館師走十周年を指呼にして

十二月十四日　朝日カルチャー若草句会

木兎の右目が捉へたる獲物

香の先に来て花枇杷と判るまで

十二月十五日　草木瓜会

おいもおいもいしやあきいもやあきたて

焼諸屋声に落肴く人都会

暮早し赤提灯に人吸はれ

十二月十七日　登高会

鰤起し聞きて大漁節も聴き

方言も飛び出す年の市活気

寒鰤を捌く腕の黒々と

鰤起し能登に句碑建つ謀

柚子風呂に九九を覚えし頃のこと

十二月十九日　「俳句生活」出句

一の宮芭蕉を友に月今宵

十二月二十二日　若水句会

初氷割りたき指が伸びてくる

年守る未だ独身の弟よ

我が心あなたが居なければ冬野

年守る百八回の余韻聞き

主の生れ給ひし朝の初氷

朝光に冬野は色を持ち始め

十二月二十三日　目黒学園句会

牡蠣船といふ百人の宴かな

これ以上祝日いらぬ十二月

牡蠣船のもう動くことなき騒き

十二月待てど暮せど来ないバス

赤ばかり街に溢れて十二月

十二月二十五日　カトリック新聞選者吟

因縁を語る司祭やクリスマス

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

桜蘂降り敷く墓に眠りけり　横浜　小川みゆき
夕暮や茅花流しの地平線　同　同
野に山に春一番が運ぶもの　同　同
満ち潮の磯に砕けて夜光虫　八尾　山下美典
監視員緊張土用浪の浜　同　同
見るからに苦瓜といふ肌をして　神戸　藤井啓子
子育ての楽しき頃のキャンプかな　同　同
文庫本顔に伏せたるハンモック　同　同
何もせぬことが避暑地の過し方　福山　竹下陶子
父の日の米寿の吾に未来あり　同　同
蛍火のただよひ山の動き出す　同　同
星涼し我らたちまち宇宙人　龍ケ崎　今橋眞理子
一茎に黄菅の昨日今日明日　同　同
ふり向けば夕菅の野となつてをり　同　同
夕菅の今宵を消して山の雨　神戸　山田佳乃
御機嫌は斜めを向いて百合の花　同　同
露の中に一人と思ふ夜　同　同
疲鵜の濡れ色に又雨の降る　香川　湯川　雅
向日葵の正面作るために咲く　同　同
桔梗の蕾明日用明後日用　同　同
己が空扇ぎて乱し芭蕉林　奈良　古賀しぐれ
三伏や獣舎の声の鎮もりぬ　同　同
河馬といふ体重沈め夏の水　袋井　湖東紀子
海上都市空中都市に夏霞　同　同
吾は野に野は涼風に抱かるる　東京　橋本くに彦
一日が終つてゆきぬ黄菅かな　同　同
蜩のめくつてゆきし野のページ　京都　安原　葉
木々の葉の色を仕上げて晩夏かな　同　同
名苑の水も錆びゐる晩夏かな　東京　大久保白村
釣堀に水の疲れのありにけり　同　同
小諸より訪ね来られし汗の客　熱海　嶋田一歩
蜘蛛は囲を張れず虚子館庭手入　同　同
ナイターといふ連立ちてゆくところ　同　同
黒南風や鴉は叫び鴎舞ひ　柏　田丸千種
鰺を釣る島の銀行支店長　同　同
はるばると来てしげしげと蟻地獄　同　同
海風に山風も来て夏座敷　同　同
一人ゐることの広さや夏座敷　同　同
夏座敷のこして富士を見に庭に　同　同
進めずにゐる夕菅に耳澄まし　同　同
榛名富士仰ぎ夕立雲を読む　同　同
姿変へまた炎帝の現はるる

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（十一月号より）

むつみ・葉　・中　正
とほ歩・千鶴子・保　佳
憲　明・芳　子・静　龍
美　奇・眞理子・廣太郎

木の実踏み潰しバックをして駐車　大阪　林　直入

この句を拝見した時に、景色もさることながら、ブレーキの音と踏み潰された木の実の弾ける音がとっさに耳許で聞こえ、作者が経験したその時の感触まで伝わる。初めは何を踏んだのだろうと心配したに違いないが、木の実と分かった時の安堵の様子まで見え臨場感のある句である。木の実雨、木の実時雨など落ちる木の実はよく詠むが、「踏み潰し」た木の実の一瞬の出来事を身体でキャッチした句は生き生きと新鮮であり歯切れがいい。実際の生活の中の一齣も季題の「木の実」だからこそ詩になり、季題の存在感を再認識させられた句である。（むつみ）

よく「木の実踏む」という遣い方をされる季題であるが、一般的には歩いている時、踏んでその風情があるのだが、この句は最初「木の実踏み」までは一般的な句として鑑賞すると、その後徐に「潰しバックをして駐車」と、どんでん返しも甚だしい。何とも諧謔味溢れた楽しい句である。（廣太郎）

納骨の間の梅雨晴でありしかな　宝塚　水田むつみ

作者のご母堂桑田永子様は、平成二十二年四月十日に入院され、五月十日に九十一歳のご生涯を閉じられたという。ここにあらためて在りし日のお姿をお偲びし、謹んで哀悼の意を表します。

この句は、そのご納骨の折の情景かと思われる。その日は朝から梅雨が降っていたが、不思議なことに納骨の間だけ梅雨晴となったという。偶の梅雨晴であったとしても何か、遺されたものたちのことを憶う母上のやさしかったその心向けのようにも思われて、あらためて悼み偲んでいる心持が読む側にもよく伝わってくる。簡潔平明に叙されていて余韻の深い句である。（葉）

恐らく、というより間違いなく御母堂桑田永子様の納骨の日であろう。季節は梅雨であるにもかかわらず、丁度墓地で納骨の儀式が行なわれている間だけ太陽が覗いたのである。偶然とは思えない天の恵みに、参列者一同の喪心が窺える。御母堂様への限りない愛も感じる事が出来る。（廣太郎）（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

汀子選

どうしてもできぬ俳句の暑苦し　豊中　瀧　青佳
さりげなく友逝くことも秋立ちぬ　京都　同　安原　葉
花莫蓙といふもてなしに寛ぎぬ　同
花莫蓙にけふの疲れを癒されよ　東京　稲畑廣太郎
燕の子明日は飛翔といふ構へ　同
五月闇抜け真つ新な朝かな　奈良　古賀しぐれ
ホテルてふ都会の森の蝉時雨　同
避暑ホテル玻璃戸一枚づつが森　橿原　稲岡　長
汀子月旦新涼の風が吹く　同
盆の月少し濁りて情あり　神戸　後藤比奈夫
壬生の面見て京劇の面を見て　同
纏足の靴涼しとも哀しとも　たつの　浅井青陽子
小城下の午は閑けき栗の花　同
初蟬を風が運んで厨口　徳島　上﨑暮潮
鶯に老残の生ありやなし　同
思ひ出の肥後は火の国火蛾の国　東京　今井千鶴子
街路樹のマンゴー南十字星　同
花莫蓙や荘の主は里見弾

とび来たるとび去る蛍火の中に　熱海　嶋田一歩
とぶ蛍速しと思ふ試歩の吾に　同　嶋田摩耶子
月見草帰れば母が居るやうな　同
鉢植ゑのきうり初挽ぎ胡瓜もみ　神戸　長山あや
新しき朝のために木槿散る　同
娘の抱く二つの祖国いわし雲　宝塚　水田むつみ
水音の生き生きとあり木下闇　同
空蟬の縋りし風のジャカランダ　明石　中杉隆世
終戦の日は空を見て海を見て　同
終戦の日とは瓦礫の記憶のみ　高知　橋田憲明
囮鮎ますぐに水面引かれくる　同
吹く風にひと揺らぎせし蛇の衣　金沢　藤浦昭代
高原に泊つ虫の数星の数　同
高原や芒の風を追ふ下山　東京　河野美奇
鈴蘭の実となり侍る年尾句碑　同
天帝のまばゆき光梅雨明けし　熊本　岩岡中正
矢のやうな雨が降るなり鳰浮巣　同
梅雨滂沱胸に手当てて寝落ちけり

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

どうしてもできぬ俳句の暑苦し　豊中　瀧　青佳

より高きを目指す努力に障害となる暑苦しさ。

花茣蓙といふもてなしに寛ぎぬ　京都　安原　葉

古き良き時代を継承する主客。

五月闇抜け真つ新な朝かな　東京　稲畑廣太郎

梅雨晴れの朝を真っ新と見た感性。

避暑ホテル玻璃戸一枚づつが森　奈良　古賀しぐれ

森の情景を取り込んだホテル。表現の妙。

汀子月旦新涼の風が吹く　橿原　稲岡　長

「ホトトギス101」の人物評（月旦）の役目。

纏足の靴涼しとも哀しとも　神戸　後藤比奈夫

昔の纏足の靴に感慨を抱く作者。

小城下の午は閑けき栗の花　たつの　浅井青陽子

匂いの強烈な栗の花とて閑かな城下町。

思ひ出の肥後は火の国火蛾の国　徳島　上﨑暮潮

肥後熊本を思い出す作者の郷愁。（以下略）

PDF= 俳誌の salon